

知 識 探 訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

鄭和来航と海域東南アジアのイスラム化

貞好康志 (神戸大学大学院国際文化学研究科教授)



マラッカの鄭和文化博物館の展示 (2007 年 8 月筆者撮影)

鄭和(ていわ)は 15 世紀前半、明朝が 7 度にわたり東南アジアや環インド洋諸国へ派遣した大船隊の提督である。マラッカは船隊の寄港を受け入れ、明朝を後ろ盾とすることで港市国家として栄え、その後一世紀にわたり海域アジア交易の中心地となり、同時に東南アジアのイスラム拡大のセンターとなった。鄭和の各地への来航の実態や影響、特に東南アジアのイスラム化との関係については諸説紛々でいまだ謎が多い。

マラッカに関する定説は、1414 年に即位した第 2 代の王イスカンダル・シャーがイスラムに改宗したこと、第 5 代のムザッファル・シャー(在位 1445~59 年)が初めてスルタンの称号を名乗り、この頃からマラッカにイスラムが定着したらしいことである。

鄭和に随行した通訳・馬歡の『瀛涯勝覧(えいがいしょうらん)』、1511 年にマラッカを陥落させたポルトガルの官吏トメ・ピレスの『東方諸国記』、マラッカの王統を継承するジョホール王国で編まれた『マレー王統記』の記述などを総合的に検証すると、おおむね 15 世紀半ばごろまでにマラッカの王や貴族、さらに一般民衆もイスラムを受容したと推察される。

なお問題となるのは、鄭和来航が各訪問地のイスラム化に影響を及ぼしたのではないかという論点である。東南アジアのイスラム化自体はスマトラ北部のサムドラ・パサイ王国が 13 世紀末に先んじており、マラッカにもここから影響が及んだとの説が有力である。ただ、島しょ部の他地域に急速にイスラムが広がったのはマラッカのイスラム化の後である。

広く見れば、鄭和来航を利用したマラッカの交易センターとしての基盤確立とイスラム受容以降、マラッカを中心とする交易網の拡大と、各地の商人や支配者のイスラム改宗が相互促進的に進んだ(イスラム信仰

は商取引上の「信用」として機能した)、つまり鄭和来航が間接的に東南アジアのイスラム拡大に寄与した、ということと言えるだろう。

だがもっと踏み込んで、鄭和や随行した中国人によってイスラムが東南アジア各地に伝えられたとする説もある。提督鄭和も馬歡ら部下の多くもイスラム教徒(ムスリム)であったことはよく知られた史実だから、この説を一蹴することはできない。これはマレーシアよりインドネシアで根強い。

1960 年代に民間史家パラリンドンガンやインドネシア大学教授ムリヨノは、鄭和や部下たちがジャワでイスラムを布教したとの記述を含む本を出版した。2 人の本はスハルト体制下「社会の安寧を乱す」とされ発禁となった。現在発禁は一応解かれたが、この問題を巡る議論はいまだタブーに近い。

いわゆるプリブミ(インドネシアの先住民)が皆ムスリムとは限らないインドネシアに比べ、プミブトラ(マレーシアの先住民族)の中核であるマレー人の定義上「ムスリムであること」が不可欠の要件とされるマレーシアの方がこの種の議論には一層センシティブにならざるを得ないだろう。

こうした現代の政治的配慮と別に一般論を言えば、東南アジアのイスラム拡大にはさまざまな主体やルートがあったと推測される。マラッカを中心とする交易網を支えた各国商人のかなりの部分はムスリムであり、中国人も例外ではなかった。

ジャワにおいても非ムスリムの中国系移民が大量に流入し、ジャワ人などムスリムの「原住民」と社会・文化的に対立的な構図が形成されるのは 19 世紀以降のことである。マレー半島でもおそらく同様の状況だったのではないか。

15 世紀当時にはマレーシアとインドネシアという区別など影もなく、マレー半島とスマトラ、ジャワ、ボルネオ、インドシナ半島沿岸部などは、同じ海域の中で一つにつながっていた、ということは何度でも思い起こす必要があるだろう。

< 筆者紹介 >

1964 年福岡県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科単位取得退学。学術博士。専門は東南アジア地域研究、インドネシア史。主要著作に『華人のインドネシア現代史—はるかな国民統合への道』(木犀社、2016 年)などがある。